Hudson River School とアメリカの自然 Bryant と Cole

高 橋 順 子

植民地からアメリカが独立して半世紀がたった19世紀前半，アメリカ人のあいだにはヨーロッパの影響が強く，ヨーロッパ志向が強かった。しかし，その一方ではアメリカの知識人のあいだでは，歴史が短いなりにも，アメリカは自分たち自身で築いてきた国という意識のもとに，自分の国に対する自信と誇りを強めていった。

この傾向は画家である Thomas Cole (1801–1848) にも，詩人である William Cullen Bryant (1794–1878) にもその作品をとおして共通していた。ここでは Cole の絵と Bryant の詩に共存するテーマ，“アメリカの自然” について論じる。

I. "Falls of the Kaaterskill"[1] (写真参照)

Thomas Cole の1826年の作品である "Falls of the Kaaterskill" は Bryant の "A Forest Hymn" の一部を彷彿とさせるものがある。

"The groves were God's first temples."[2]
(木々の茂れるところは神の最初の聖堂だった)

Bryantの詩とは表現形式の上では異なっているかもしれないが，この絵の中央部の Indian[3] の "God" または "the Mightiest" は，Bryant のいう God とは同じ精神であるはずである。ヨーロッパから渡ってきた人たちが，この大陸の大自然を "God's first temples" と呼ぶずっと以前から，Native Americans は，そのことを信じ続けてきたに違いない。この絵の構図は，上段と下段に分かれた岩の地層と，その上部に広がる原生林と，左右に広がる空の space よって horizontal な線が強調され画面全体を支配し，上段と下段の美しい二本の滝がヴェールのように岩肌をつたって直角に落ち，画面両側の紅葉した木々と共に vertical な効果をだしている。中央に Indian の狩人をひとり配しているが，その小ささが周りの自然の雄大さを強調している。嵐の去った直後（画面再上部の空には遠退いてゆくスコールが見える。）に再び訪れた明るい陽光が輝いている。頭飾りをつけた Indian が長い杖（rifleという説もある[4]）のようなものを片手に持って，滝口に突き出した岩場に雄々しく立ち，彼の前には，ふたつの滝の間から虹が立ち昇りかけている。その空間は誰も行ったことのない場所，おそらくこの Indian と彼の仲間だけしか知らない場所，彼らの聖域なのである。

...in the darkling wood,
Amid the cool and silence, be knelt down,
And offered to the Mightiest solemn thanks
And supplication.[5]

ここに立っている Indian は，自然の厳しさ，荘厳さ，壮麗さに常に畏敬の念をもってのぞむ人間本来の姿を象徴している。絶壁の上の原生林は太古の姿そのものであり，いっさいの生きものの接近を拒んでいるようにみえる。何万年もの歴史を物語るいく層にもわたる地層を露出した岩肌，スコールの後，水嵩を増した滝が滝壺に流れ落ちる勢い，飛沫のすさまじさ，美しく紅葉している木々もあれば，枯れ朽ちて倒れてゆく木々もある。この激しく流れ落ちる二本の滝を前にしてこの Indian の勇者が，どれほどの声で歌おうと，叫ぼうと，祈ろうと，その声はこの大自然のあげる轟音の中で，何程の力を示せようか。彼の声もまた，その姿と同じように，荒涼たる大自然の中に，ただひたすら吸い込まれてゆくだけである。彼はもちろんそれを承知で，なおも一歩でも全能なる精霊の存在に近ずこうとこの場所を選んだに違いない。この敬虔さを，この自然なる姿を，押し退けようとする者があれば，それは創造主の意志に反する行為であり，それをすることは結局，その者たちを破壊へ導くことになるであろう。

Baigell によると，Cole は Ralph Waldo Emerson に匹敵する19世紀アメリカの偉大な人物であるという。(6) 彼はヨーロッパの文化をアメリカに伝え，その上で，当時独自の文化が育ちつつあったアメリカにおいて，彼は風景画という新しいテーマを絵画の重要な一分野として開拓し，次世代に伝えてゆく役割を果たした。

Cole は絵画だけでなく，生涯にわたってよく詩を書き，評論も書いた。詩では，'The Wild' (1826), 'Sunset' (1843), 'Before Sunrise' (1847) が特に有名である。評論では，'Essay on American Scenery' (1836), 'Lecture on American Scenery' (1841) などがある。彼は，自然の中に常に創造主，神に対する畏敬の念を感じ，それを描こうとしたのであり，彼の作品は宗教的要素と風景との調和がみられる。

絵画においては，画家の倫理観，信仰，詩情などが常に表現されているべきで，むしろ，陰影，色の使い方，形などは二次的なものだと考えられ

る。絵画とは，自然をベースとして，その上方に何か輝いている尊いものを人々が見に行くための梯子のような役割をもっている。Cole は樹林の下に生える低木や，割れた木の根株などをていねいに描いているが，これは自然の中の再生を象徴するものである。彼の作品のほとんどが地上より少し高い所から遠景を見ているように描かれているが，これは，その場所を初めて見たような，新鮮な印象を与える効果がある。また，前述の Indian のように小さな人物をその中に描き入れることがしばしばあるが，そうすることによって自然の風景の壮大さを強調することになる。'Kaatskill Falls' (1826), 'St. John in the Wilderness' (1827) 'Gelyna' (1826) などが例としてあげられる。

Cole が John S. Copley (1738–1815), Benjamin West (1738–1820), John Vanderlyn (1775–1852), Joseph M. W. Turner (1775–1851), John Constable (1776–1837) など他の先達画家たちから決定的な影響を受ける前に風景画に取り組むようになったことは幸いであったかもしれない。もしそれ以前にヨーロッパの風景画の影響を受けていたら，彼の荒々しく雄壮な大自然を描く手法は生まれてこなかったかもしれない。ヨーロッパの風景画は，他の分野の絵画と等しく，その手法は円熟し，完璧であり，全体として美しい叙情的雰囲気に溢れているが，その中には人を拒むほどの，自然の雄々しさ，逞しさ，荘厳さは乏しい。20世紀以前のアメリカの画家の作品を，その技法において稚拙だという意見をよく聞くが，それならば，ヨーロッパの画家が新世界を旅して，アメリカの自然風景を描いたとしたら，どのような作品が生まれていたであろうか。彼らの，埋もれるほど厚い，長い，重い歴史の中で形式化し，様式化してきた生活の中で生まれる絵画と，新天地で，歴史の重圧はなくとも，自身の力で生活の場を開拓してゆかなければならない環境の中で育ってきた絵画とでは，さまざまな点で大いに相違が生じるであろう。たとえ，その手法，技術に遅れがあろうとも彼らの精神生活から自ずと溢れてくる自然への愛着と，その神秘性への憧憬と，

神に対する畏敬の念と，これらの要素をすべてキャンバスにいかに表現するかを競い合ったアメリカの画家たちの努力は，高く評価されるものがあるはずである。同じ時代に，ヨーロッパでは遠い遠い過去となった人々の生活のスタイルが，アメリカでは着々とその基盤を築き続けていたのである。それは，自然を征服し，管理するのではなく，自然の中へ，何も持たずに入っていって，その中に静かに身をおいて，自然の声をききとろうとする姿勢である。

Cole は imitation の自然を嫌い，想像から風景画を描くことを容認しなかった。しかしそれは自然をそのまま写しとるように描くことではなく，その風景をじっくりと見て，自分の心の中に湧いてくる感動を画面に描き込むこと，その感覚を探求すること，それを彼は理想的絵画と考えた。描かれたものは必ずしも実際のとおりではないかもしれないが，その場に足を運んで，その場の雰囲気をくみとり，いかにその光景を自分の思うように，感じたように描くかが画家としてもっとも大切な心構えであり，それによって，その風景がさらに迫力を増し，力強く，美しいものに仕上がれば，それは理想的な絵画となるのである。

II. Cole と Bryant の自然観

'To Cole, The Painter, Departing for Europe' は Bryant がヨーロッパへ発つ Cole に贈った詩として有名である。アメリカの壮大，荘厳，人類未到，人間の生活圏のはるか先にほとんど無限に広がる広大な自然，人が未だ足を踏入れたことのない場所，神の存在を信じるにふさわしい神秘性，厳粛さ，人の力がはるかに及ばぬ地域，荒々しさ，これが新世界アメリカの自然であった。それを描いてきた Cole が旧世界ヨーロッパへ行き，その伝統的絵画様式（特に風景画の技法）の影響を受け，自分の祖先の国の文化に帰化していってしまい，アメリカ的風景画の力強さ，厳しさ，壮大さなどの特徴を忘れ去ってしまう，または彼の作品からそれらの要素

が失われていってしまうことを Bryant は恐れたのである。これは，アメリカへの愛国心とかヨーロッパへの嫌悪とか敬遠とかいうものではない。自らも芸術家として新しい絵画の世界，新世界として新しく開拓されたアメリカならではの題材と手法とテーマを，さらに確立し，途中で旧世界に戻らないでほしいという Bryant の切実な願望がこめられているはずである。1829年，Cole はヨーロッパ行を前にしてナイアガラの滝へ旅行した。新世界アメリカの野性味豊かな自然を，あらためて目に焼き付けておきたかったからである。ヨーロッパ旅行の成果として Cole は自らの絵画様式をさらに広げ，技法にも磨きがかかり，その“輝き”はさらに増していった。Cole は Bryant の助言を守り通し，その上にプラスするものを持ち帰ったことになる。

Bryant の期待に応えてヨーロッパから帰った Cole はいくつかのヨーロッパを主題とした作品を描いたが，それに終わることはなかった。おそらくヨーロッパの旅を通して Cole は“神の存在する処”を探しだすことはなかったのではないかと考えられる。神の存在するところは結局，自分がもっとも好んでいる場所のどこかにあるもので，自分の心がいちばん安まる処，幸福感を得られる処，すなわち，自分の生活のある処，良き友人のいる処，そしてそれらすべてを包み込んでいるアメリカの大自然の中なのであった。Cole はそこへ戻ってきたのである。ヨーロッパの経験から自分の信条を再確認して，もはや彼に戸惑いはなかった。彼はその後，四部作からなる“The Voyage of Life”（1840）を制作するが，題材が宗教的でありながら，その背景はまさしく新大陸の広大な，そして神秘的な自然なのである。彼はその他にも，Hudson River 周辺の風景を生涯描き続けた。

Cole の功績はアメリカの壮大な自然の姿をただキャンバスに写しとるだけでなく，そこに創作者（画家）としての philosophy を表現したことである。最も効果的な構図を取り，最も効果的な“時”をつかみ（光と影

の効果，天候の具合，風，季節など)，最も効果的な色を使うことによって彼は，その一幅の絵を画家の創造物にしていったのである。思想，宗教観，詩的感覚をもとに，自分がもっとも強調したかったもの，表現したかったものが，Cole の絵の中には塗り込められていて，故に見る者の心に迫ってくるものを持っている。画家の philosophy なしの風景画は，ただの絵はがきかポスターのようなもので，美しいけれど，印象が薄く，感動がない。また，ダイナミックな構図で，華やかな絵であってもそこに詩情が感じられなければ，ただの大きなキャンバスに過ぎないのである。

Bryant は Cole たち Hudson River School の画家たちに，積極的に自然の中へ入って行って，自然の教えを大いに学びとるように助言した。Cole や Asher B. Durand (1796–1886) は迷路のような埃だらけの町中から抜け出して Hudson 川をさかのぼってゆく旅をした。Bryant も同行することが多かった。彼らは岩だらけの渓谷や，果てしない森林，はるか深い谷底を流れる川に出会い，Catskill の山々，誰も通らない絶壁，岩間に松の生い茂った所，誰も知らない小さな滝などを探して歩いた。後に Cole は Hudson 川上流 Catskill の "Rip Van Winkle" の背景を思わせるような小村に居を構え，ほとんどそこで過ごした。

Hudson River School の台頭によって，風景画は歴史画ほど価値はないとする従来の評価を覆すことになった。Cole は生涯 Catskill の自然を描き続け，その対象に対する情熱は最後まで衰えることはなかった。1842年，イタリアの旅から帰って，彼は友人の George W. Greene に次のように書き送っている。

「ヨーロッパ・アルプスもアルペン山脈もエトナ山さえも，われらが Catskill に比べれば，霞んでしまう。」

「私はいつもアメリカの風景を見るたびに喜びが増してくるように思

う。世界中他の所では決して見ることのない，何か特異な魅力を内蔵しているような気がする。」(7)

後に the father of American songs と呼ばれるようになった Bryant は新世界アメリカの持つ雰囲気，情緒に対して，心から共感し，人の気持ちの内なる思いを，雄大な自然の中の森や，野原や，花や鳥などに託してアメリカそのものをうたいあげた。Puritan の移民の子孫として Bryant の思考の基準はヨーロッパにあった。しかし，Bryant がニューヨークへ移る前に書いた最後の作品である 'A Forest Hymn' (1825) など彼の詩の中でうたわれている情感は，もうひとつの世界（新世界）において湧き出でたもので，まったく新たな，新鮮な着想であった。延々と続く雄壮な森林，どこまでも広がる草原，激流の縁に聳え立つ大木，それはアメリカの心で描きだされた，アメリカの風景であった。この他にも 'To a Waterfowl' (1815), 'Inscription for the Entrance' (1815), 'The Prairies' (1833) など，自然の美をうたった多くの詩を書いた。彼の育った the Cummington 農場は，Hampshire 地方の岩だらけの小高い丘に囲まれ，狭く，うねった深い渓谷や，流れの速い川がいたるところにあった。畑を耕し，植え付けをし，草を刈り，干し草を作り，リンゴを栽培し，建築作業をしたりしながら，彼はラテン語やギリシヤ語の勉強をした。17才で 'Thanatopsis' を書き，聖書やホーマーを学びながら，植物学にも精を出した。Bryant の自然への愛着は子供の頃の環境に起因している。彼は自伝に，「かなり幼い頃から，自然を観察することが好きだった。」と書いている。窓から見える一面の雪景色の中の夜明けの様，紅葉した木々の燃え立つような色，雷をともなった嵐が近ずいてくる時の暗くなってゆく様子，その嵐が去って急に陽光がさしてくるとき，そして虹，再び春が来て花が咲き競う季節，冬になって初めて雪が降ったとき，このような光景を幼い頃から見続け，その美しさと，厳しさを素直に受けとめ，その自然の

変化に対する関心は年と共に深まっていった。彼の育った Berkshire 地方の果樹園，牧草地，小さな流れ，大きな川，深い森，Greylock までうねうねと続く丘，その向こうの大きな山々，この中で暮らした彼に，炎を煽る風のように湧いてくる自分の感情を言葉であらわしたいという思いは熱かった。このように，自然が彼を詩に導いたとすれば，また，等しく，詩が彼を自然に引き寄せたとも言える。彼が最初に書いた詩 'Thanatopsis' は死生観であり自然観照の詩でもある。Bryant はアメリカ文学においてだれよりも多く，自然に関する詩を書いた。彼の "自然" の中には風景だけでなく，昆虫，鳥，樹木などが，かなりの精密さで描かれている。また，花や木に関しては，他のアメリカの詩人の誰よりも多くの species が出てくる。動物に関しても同様で，鹿，リス，狼，パンサーなどが出てくる。特に鹿は，深い大きな森の symbol としてうたわれている。鳥に関してはその姿や色合よりも，鳴声の美しさに最も関心を寄せている。特に花に関しては，彼は通常，新しい品種を選んで詩を創った。すみれを除くと，彼は70年以上にわたる詩作の中で，二度と同じ花を使うことはなかった。(8)

Bryant は自然の中に美しさだけでなく，人の心を癒す力を見出していた。Puritan の彼にとって，自然と神の存在は常に一連の発想であり，故に彼が自然をうたうとき，そこには必ず宗教的要素が織り込まれていた。自然が "works of God" なら，その中には美と力があり，故に人の心を活かすものがあるはずであり，また，その中には神秘的で，ある種の畏れを感じさせる要素もある。それが神への畏敬の念に発展する。

"And to the beautiful order of thy works
Learn to conform the order of our lives." (9)

(神のなせる技によるこの見事な自然の秩序に，われわれの生活を適合させることを学ぼうではないか。)

Cole の 'Falls of the Kaaterskill' に描かれた，谷底に横たわる倒木と，天に向かって茂り立つ樹林が象徴するところと同じく，Bryant の 'A Forest Hymn' にも自然の再生を表現し，それを人間の世界における希望として暗示している。

"Lo! all grow old and die—but see again,
How on the faltering footsteps of decay
Youth presses—ever gay and beautiful youth
In all its beautiful forms."(10)

Bryant は 84 年の生涯に多くの詩を残したが彼は，50 年近くも *New York Evening Post* の編集長を勤め，当時の Now York の journalism に多くの貢献をした。このように彼は立派な市民であり，熱心な愛国者であった。しかしながらこのながい年月を仕事にとられた分，彼の詩作への時間がかなり削られてしまったのではないかとする評価もある。(11)

III. 旧世界への決別

Cole が画家としての名声を高めていった1830年代，40年代はアメリカが大いなる発展を遂げた時代のひとつでもあった。19世紀に入るとニューヨークは文化の中心地としてフィラデルフィアにとって代わるようになっていった。当時ニューヨークでは，フランス製の柱時計，ブラッセルの絨毯，イタリア製の置物，リヨンのカーテンなどの輸入品が氾濫している一方でなお，そこは田舎の要素とコスモポリタンの風潮が混ざりあった特異な所であった。旧世界からの多様な輸入品が街を飾る中でブロードウエイではなお農耕が行なわれていた。多種多様の産業が発達し，運河や鉄道も発展し，都市部は人口増加が激しかった。そのため，ニューヨークのような大都市は喧騒の中で汚染が進み，Cole は都会を侮蔑するようになった。おそらく彼は，ヨーロッパで見た都市の過度の腐敗と零落を連想し，この

国がたいへんなスピードで，その悪夢の後を追っているような気がしたに違いない。開発の波は都市部のみでなく，地方へも広がってゆくにつれ，彼らのパラダイスであった大自然が失われて行く。野原は焼かれ，至る所で木を切る鋸の音が聞かれ，野生動物の皮をなめす悪臭が流れ，彼らのワゴンが頻繁に行き交う。Cole はこう嘆いた。

「人が開発事業を行うために，新大陸の美しい自然がどんどん失われてゆく。そして，その後に人が築くものは，まったく芸術的価値のないものばかりだ。」(12)

Cole が最初のヨーロッパ旅行から帰って制作した5部からなる "The Course of Empire" (1836) は，ヨーロッパに対する彼の意思表示であり，また，アメリカへの警告も含まれているように思われる。繁栄を誇って，頂点まで達して，そして滅びたヨーロッパ。イギリスで生まれた Cole がアメリカで成功した画家となって再びヨーロッパへ行き，自らの目で見たことへの答えではなかったか。すなわち，もうヨーロッパには尊敬すべきものは何もない，神の存在する自然を貪って破壊してしまった後にはなにも残るものはない今，ヨーロッパでは人々はすでに滅びてしまった世界に住んでいる。一方，アメリカはと考えるとき，これはアメリカへの警告であるとも考えられる。アメリカのこの壮大な自然がいつまで神聖な姿で保ち堪えられるか。都市部の著しい発展，それに伴う大規模な開発，失われてゆく自然，こういう現象はすでに起っていたのである。こうしてみると，これは Cole がアメリカの実状を嘆いて描いた作品と言えるかもしれない。自然が消滅してゆくことは，その中に存在したはずの Bryant のいう "God's first temples" も失われてゆくことを意味する。そうなったら人間は何を心の糧にして生きてゆけばいいのか，その不安，焦燥をこの連作から窺いとることができよう。

Hudson River School の隆盛に伴って，人々の日常生活の中にも風景画に対する関心の高さが広がっていった。食器など日用品に Catskill の

風景や，花，樹木などがデザインとして登場し，Hudson 川を昇る船旅も盛んになった。また川岸には別荘が建ち並ぶようになり，一部の金持ちがヨーロッパやメキシコから持ち帰ったアーチや物見台などを建てたり，温室や橋などを築く者まで現われた。(13) しかし，この川沿いの地をローマのテベレ川やロンドンのテムズ川やドイツのライン川のようにしようとする者たちの意向に反して，Hudson 川はそのまま変わることはなかった。Mississippi 川周辺に暮らした人が，Hudson 川は暗くて，うねうねとしているので，その流域を旅する気が起らないと言ったことがある。マンハッタン以北の Hudson 川流域，特にその西岸は人の手が入るのをながいこと拒み続けた。Hudson が Hudson として残った理由のひとつは，上流に向かって，この川は深い山と谷を曲がりくねって，うねるように進むため，開発が遅れたことも幸いしていると思われる。

ヨーロッパの原型を常にひきずっているアメリカは約束の地と呼ばれ，新世界と呼ばれても，“新しい”故に過去の歴史，文化，文明の積み重ねはなく，自分たちが捨ててきた，または逃れてきた旧世界の生活，文化をそのまま新世界へ持ち込むことになった。そして，それはひとつの文化ではなく，ヨーロッパにひしめくように存在していた多くの国々の，それぞれに異った文化であった。ヨーロッパからは，アメリカは未開の地，歴史のない国，文化のない国としての非難が押し寄せる。その中で，新しく“アメリカ人”となった人々は，日々の生活と闘いながら，いかにして旧世界の文化に対応していったであろうか。たとえ自身の過去が，また親の代の過去がヨーロッパにあろうと，彼らは“アメリカ”独自のものを創りだそうと努力し，その意味での patriotism を意識的にも，潜在的にも強く自覚するようになったのではなかろうか。その結果としてまず国家を築くべく政治家が出現し，詩人，作家，画家が現われ，アメリカの精神生活の基礎造りに深い貢献をしていった。ではヨーロッパの文化をひきずってきている“アメリカ人”たちにとって，新世界で“自分たちの国”を築く過程で，

まさに“アメリカ的なもの”とは何であったかというと，それは新大陸の“大自然”であった。ヨーロッパで文学者が複雑化した社会構造の狭間を深みを表現することに専念し，画家たちは肖像画，貴族や商人の生活，宗教画，田園風景などを競って描いていたときに，アメリカでは“新大陸の自然”の中で，政治家も，文学者も芸術家も，“自然”を除外視しての政治生活，文学生活，芸術生活はありえなかった。この地には，王族も貴族もなく，町民と農民の区別もなく，すべての人々は同じように畑を耕し，木を切り，家畜の世話をし，それぞれの信仰をもつ自由を与えられた人々であった。アメリカで最初にできた絵画の学校は，肖像画でも宗教画でもなく，風景画のための学校であった。

新大陸の，自然に恵まれた地に，風景画がひとつの独立したジャンルとして育っていったのは自然の成り行きではなかったであろうか。肖像画，歴史画はすでにその市場を獲得していたが，ヨーロッパのように，美術館，サロン，定期的展覧会などの画家たちにとって自由な画題を発表する場はほとんどなく，パトロンの数も限られていた。しかしながら，こういう状態がアメリカの画家たちにプラスの要因になったと考えることもできよう。伝統がない，規制がないということは，彼らが自由であり，どのようにでも創造的であることが許された，画家たちは自分で自由に画材を選び，自由なスタイルで描くことができた，まさに“新世界”である。確かに歴史，伝統の浅いアメリカであるが，しかし反面，ヨーロッパで確立されつくしていた“スタイル”を必ずしも踏襲しなくても良いという。自由があった。その“自由”がアメリカ独自の絵画のスタイルを築きあげていった。Hudson River School のスタイルはヨーロッパのどこにも存在しないし，後の西部の American scenes を描き続けた George C. Bingham (1811–1879) や Frederic Remington (1861–1909)，解剖学に基ずいたリアルな人物像を，光の効果とともに風景画の中に活写した Thomas Eakins (1844–1916)，New England に住み，その自然の美しさと厳しさに対峙し

つつ，その風景，野生の動物，そこに暮す人々を描いた Winslow Homer (1836–1910) などの，アメリカの日常生活に基づいた題材と，力強い表現技法は，常にその背景にある新大陸の自然とともに，もはやヨーロッパのそれとは，はっきりと決別していったことが明白である。

註：

(1) Baigell によれば，この滝は今では地元の人たちには Haines Falls と呼ばれているそうである。

(2) McMichael, George, ed., *Concise Anthology of American Literature*, second edition, Macmilan, New York, 1985, p. 358.

(3) 文献にはしばしば Indian と記述されているので，その通りの名称を使ったが，現在米国ではこの呼称は差別用語であるとされ，代わりに Native Americans または Native People と言われるようになっている。

(4) O'Neill, John P., ed., *American Paradise, The World of the Hudson River School*, the Metropolitan Museum of Art, New York, 1987, p. 122.

(5) McMichael, p. 358.

(6) Baigell, Matthew, *COLE*, Watson-Guptill, New York, 1985, p. 10.

(7) Brooks, Van Wyck, *The World of Washington Irving*, E. P. Dutton, New York, 1944, p. 362.

(8) Foerster Norman, *Nature in American Literature*, Russell & Russell, New York, 1958, p. 10.
Bryant は植物学に興味をもち勉強した。

(9) McMichael, p. 360.

(10) ibid., p. 359.

(11) Brooks, p. 204.

(12) Baigell, p. 22.

(13) Brooks, p. 365.

写真："Falls of the Kaaterskill" by Thomas Cole, Matthew Baigell, *COLE*, Watson-Guptill Publisher, New York, 1985 より複写した。

参考文献：

Adams, Arthur G., *The Hudson River in Literature*, Fordham University Press, New York, 1988.

Baigell, Matthew, *COLE*, Watson-Guptill Publisher, New York, 1985.

Brooks, Van Wyck, *The World of Washington Irving*, E. P. Dutton and Co., Inc., New York, 1944.

Foerster, Norman, *Nature in American Literature,* Russell & Russell, New York, 1958.

Horwitz, Howard, *By the Law of Nature*, Oxford University Press, New York, 1991.

Johns, Elizabeth, *Thomas Eakins, The Heroism of Modern Life*, Princeton University Press, New Jersey, 1983.

Judge, Mary A., *Winslow Homer*, Crown Publishers, Inc., New York, 1986.

McMichael, George, ed., *Concise Anthology of American Literature*, second edition, Macmilan, New York, 1985.

Novak, Barbara, *Nature and Culture*, American Landscape and Painting 1825-1875, Oxford University Press, New York, 1980.

O'Neill, John P., ed., *American Paradise, The World of the Hudson River School*, The Metropolitan Museum of Art, New York, 1987.

Selz, Jean, *Turner*, Crown Publisher, Inc., New York. 1991.

Soby, James T., and Dorothy C. Miller, *Romantic Painting in America*, The Museum of Modern Art, New York, 1943.

Stebbins, Theodore E., Jr., Carol Troyen, and Trevor F. Fairbrother, *A New World: Masterpieces of American Painting 1760-1910*, Museum of Fine Arts, Boston, 1983.

Walker, John, *Constable*, H. N. Abrams, Inc., New York, 1991.

Wilson, Rob, American Sublime, *The Genealogy of a Poetic Genre*, The University of Wisconsin Press, 1991.